

平成 30 年度 食育推進に係る実践報告書

学校名

三次市立三次小学校

1 学校における食育の現状（昨年度からの課題等）

- ・基本的な生活リズムが乱れがちな児童が多く、食生活が不規則であったり、食事の内容も整っていないものであったり、朝食も、欠食やとりあえず食べて登校するという児童がいる。
- ・食べることに関心のある児童は多く、給食を楽しみに登校してくる児童も多い。給食時の笑顔や、返却時の挨拶はとても気持ちよく、給食時間の指導では、積極的に意見や感想を伝えてくる子どもが多くいる。

2 学校の食育に係る目標（成果指標・目標値）

- ・食事の基本的なマナーを身に付ける。マナーを守ろうと努力できる。見取り 90%以上。
- ・給食を自主的に食べることができる。見取り 95%以上。

3 食育の目標に対する具体的な取組

【取組 1】（テーマ） 児童の給食や食事へ関心を高める。

- ・給食委員会の活動を中心に、給食放送に食材のクイズをとり入れたり、各学年のリクエスト給食を毎月実施したりして、全校児童に関心をもたせるよう取組んだ。
- ・給食時間に毎日全クラスを巡回することで、食材の産地や栄養など細かに伝えていくように心掛けた。
- ・給食時間の巡回のときに子どもたちの好き嫌いや、食事への関心などを把握し、個々の家庭の背景などについては担任と連携をとるようにした。

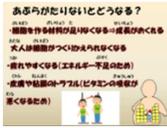
【取組 2】（テーマ） マナーを守り食事に感謝できる児童を育てる



- ・児童会の給食委員会の活動で、野菜を好きになってもらおうと野菜に関するクイズの実施や、給食の返却時のマナーや食事のマナーを劇やポスター掲示で知らせ、それを守ることが周りへの気遣いであること、給食にかかわる人への感謝を表すことにつながることを伝えた。
- ・学級活動を中心に、配膳の仕方や、食事のマナーを守ること、みんなが気持ちよく食事ができることなどを指導することができた。ハンカチ持参や食器の置き方など、意識の高まりが見えている。
- ・食事マナーについての授業後、給食後に感謝の気持ちのこもった挨拶が大きな声でできるようになった学年の姿が、全校児童へ広がりを見せた。挨拶は95%以上できている。

【取組 3】（テーマ） 自分の生活に生かせる食育の具体的な実践

- ・三次市の健康推進のひとつ『健塩』を、一昨年度から学校給食でも実践するよう取組んでいるところである。今年度はテーマを「生活習慣病の予防」とし、グループで、「糖」「脂肪」「運動」についての指導を市内の栄養教諭・栄養職員で分担し、資料作りや指導実践の取組を進めてきた。三次小学校や河内小学校では、食育朝会で『脂と油』をテーマに、具体物を示しながら全校児童に指導した。
- ・自分の食べるお菓子の脂質や、食事での脂肪の摂り方など関心をもたせることができた。



- ・一部の児童に残食は見られるものの、大半の児童の食べ残しはほぼなくなっている。

4 「ひろしま給食100万食プロジェクト」の取組について

- ・給食委員会の児童と、『ひろしま給食100万食プロジェクト』へ向けて、今年度も献立の応募に取り組んだ。残念ながら入賞はできなかったが、献立、キャッチコピーともに応募し、全校での紹介や委員会活動に活用した。また、学校給食週間にこれまでの「ひろしま給食100万食プロジェクト」のメニューを5日間実施したことで、広島産レモンの生産量が全国1位であることを改めて実感することになった。
- ・昨年に続き、三次市内の栄養教諭・栄養職員で市内高学年児童を対象に、『ひろしま給食メニュー親子クッキング』を実施し、『ひろしま給食』の啓発活動を行った。



- ・参加者からは「家庭でもぜひ作ってみたい。」「10月の食育ウィークが楽しみ。」などの意見があり、今後も続けていきたい取組となった。

5 取組に対する成果と課題

【成果】

- ・昨年度の食育の授業が、今年度につながっていることを実感できた。特に給食時の挨拶や感謝の気持ちについては、調理場の職員にも変化がわかるほどの成果が見えた。
- ・給食時間に訪問するのを待っている児童も多い。
- ・教職員と一緒にアレルギーや感染症などについての研修をすることができた。

【課題】

- ・教職員に基本的な食習慣や生活習慣が学習態度に及ぼす影響が大きいことを今以上に理解されるよう、具体的な研修が重要だと考える。
- ・朝食を食べて来られない児童の学習意欲や態度に課題が見え、食育の必要性をこれまで以上に感じている。

6 今後の取組に向けた改善方策について

- ・市内の栄養教諭・栄養職員で、授業や研究テーマなどを共有し、指導内容や方法をまとめて連携していく。
- ・職員全体に、食育の重要性について意識を高めていけるよう研修を行う。
- ・三次ふるさとランチの日などの機会を利用し、子どもたちにとって身近に感じる食育から取り組んでいく。